SPECIAL



MEDICAL STAFF_02

診療看護師（JNP）

東京医療センター

船迫　加奈

出　身　地：鹿児島県
部　　活：ラグビー部のマネージャー
座 右 の 銘：備えあれば憂いなし

高度な看護で医師と協働し質の高い医療を支える

東京医療センターには現在、11名の診療看護師（JNP）が所属しており、特定行為の実施に加え、相対的医行為にも携わっています。当院は他施設と比較しても多くのJNPが在籍しており、私自身、入職後に臨床の場で活躍するJNPの先輩方の姿に触れたことが、JNPを目指す大きなきっかけとなりました。

私は救急科に所属しており、ICUにおける抜管後の嚥下評価や離床・リハビリ前の下肢エコー検査など、時間を要する評価や処置を担当し、医師が診療に集中できる環境づくりを支援しています。

また、気管切開チューブの交換などの特定行為についても、JNPが責任をもって管理する体制を整えており、医師がその都度対応することなく、必要なタイミングで安全に実施できるよう運用しています。

さらに、急変予防や早期介入を目的に、院内迅速対応チーム（RRT）や呼吸サポートチーム（RST）の一員として組織横断的にも活動しており、最近では気管切開患者さんの安全管理を目的としたラウンドの立ち上げにも取り組んでいます。

JNPの専門性が支えるチーム医療と迅速な診療対応

JNPの重要な役割の一つは、医師と多職種をつなぐことです。患者さんに最善の医療を提供するためには、医師だけでなく、多職種がそれぞれの専門性を発揮しながら連携することが不可欠です。

その中でJNPは、情報共有の質を高め、医師と多職種をつなぐ“橋渡し役”として、それぞれの専門性を最大限に活かしたチーム医療の実現を支援しています。

JNPが関わることで、処置や治療がより迅速に進み、医師の診療が円滑になる場面も増えてきました。医師がすべてを担うのではなく、私たちが担うべき役割を適切なタイミングで果たすことで、医師の負担軽減だけでなく、患者さんへの早期介入や医療の質向上にもつながると考えています。

実際に、気管切開患者さんの管理やチューブ選択について先生方から相談を受け、適切な対応につなげることができた経験があります。「船迫さんがいてもらってよかった」と言っていただけたことは、JNPとして専門性を発揮できた大きなやりがいとなりました。

専門的視点で診療を支える医師の身近な相談相手として

JNPは、看護師として患者さんを全人的に捉える視点に加え、医学的アセスメントや臨床推論を活かして、患者さんに必要な医療を適切なタイミングで届ける存在です。

先生方には、血管確保が困難な患者さんへのPICC挿入、気管切開患者さんの管理、嚥下評価、状態変化への対応など、JNPが力になれる場面がありましたら、ぜひ気軽にお声がけいただければと思います。

先生方と同じ方向を見据え、患者さんにとって最善の医療を実現できるよう、JNPとして専門性を発揮しながら、これからも身近で頼れるパートナーとして活動していきたいと思っています。



診療以外の負担を軽減し医療現場を支援する

東京医療センターには現在、12名の文書支援係が在籍しています。私たち文書支援係は、先生方が最終的に確認し、署名・押印される文書を、正確かつ効率的に作成できるよう支援する役割を担っています。作成する書類は多岐にわたり、診断書や、公的書類である自賠責保険・労災関連の書類、訪問看護指示書、生活保護意見書、介護保険意見書といった、さまざまな文書の作成支援を行っています。

直接患者さんの治療に関わる部署ではありませんが、書類作成を通して先生方の業務負担を軽減し、診療や患者さんへの対応に、より集中できる環境を整えることが、私たちの大切な役割だと考えています。医師が診療に専念できる環境を作り出すことで、間接的に多くの患者さんを救うことに貢献できることが私たちのやりがいです。

“黒子”として支える医師との信頼関係

私たちが文書を作成するうえで大切にしていることは、「決して自分たちで判断しない」ということです。私たちはあくまで先生方を支える“黒子”であり、書類の最終的な責任は署名される医師にあります。そのため、カルテ記録や看護記録など、記載されている情報をもとに下書きを作成しますが、判断が必要な部分については必ず先生に確認していただきます。

患者さんを直接診察できる立場ではないからこそ、分からない部分を推測で埋めることはせず、必要な情報を分かりやすく整理して先生方にお渡しすることを徹底しています。

先生方は外来、治療、手術、病棟業務など常に多くの仕事を抱えており、書類作成はどうしても日常業務が終わったあとになることが多いと思います。私たちは、先生方が限られた時間の中で効率よく確認できるよう、内容をしっかりと整理し、「ここを確認してください」という具体的な箇所を明示した形で下書きの書類をお渡ししています。

患者さんがどうしても急ぎで書類が欲しい場合は電話連絡で不明点を直接お聞きすることもありますが、できるだけ先生方の日々の診療リズムを崩さないことを強く意識して仕事に取り組んでいます。

正確な文書作成支援で診療を後方から支える

普段、先生方と顔を合わせてお話をすることは少ないですが、「とても助かりました」と付箋でメッセージをいただけることや、修正なく書類が完成したときにはとても嬉しいですし、書面を通じて先生方の業務を少しでも支えられていることにやりがいを感じています。

先生方とは直接関わる機会が少ない部署ではありますが、私たちはいつでも先生方の負担軽減につながる存在でありたいと思っています。先生方が患者さんと向き合う時間を少しでも増やせるよう、これからも正確で丁寧な文書作成支援を通じて、チーム医療の一員として貢献していきたいと思っています。



MEDICAL STAFF_03

文書支援係

東京医療センター

松本　里葉

出　身　地：東京都
部　　活：バレー部・生物部
座 右 の 銘：何とかなるさ



MEDICAL STAFF_04

診療放射線技師

東京医療センター
特殊撮影主任
原田 潤

出 身 地：新潟県
部　　活：陸上部（短距離）
座 右 の 銘：勇往邁進

検査の流れを一元化し医師の負担軽減を実現

診療放射線技師は、タスク・シフト/シェア推進により2021年から、静脈路確保、医薬品投与、抜針・止血、造影剤注入などの業務を担うことが可能となりました。東京医療センターでも2025年からMRIやRI検査における静脈路確保と医薬品投与を開始しています。

以前のMRI検査では、静脈路確保や造影剤投与のたびに先生方へ依頼する必要があり、検査進行や情報共有の面で負担が生じていました。現在はタスク・シフト/シェアにより、検査準備から静脈路確保、造影剤投与、抜針、画像作成・転送まで、診療放射線技師が一連の流れを担っています。これにより、検査の効率化や患者さんの待ち時間短縮、医師の負担軽減につながっており、先生方からも「読影やその他の診療業務に集中できるようになった」との声をいただいています。

放射線と画像の専門職として医師の読影と診断を支える

診療放射線技師は医師の“読影の補助”を担う役割もあります。撮影した画像を最初に確認する立場として、画像所見に関する相談にも迅速に対応できるよう、日々研鑽を重ねています。以前、造影CTの実施が困難な患者さんに対し、MRIでアダムキュービッツ動脈を描出する検査を担当した際、担当医から「画像よかったよ。ありがとう」と声をかけていただきました。この経験は、自身の専門性を活かして医療に貢献できたことを実感するとともに、診療を支える一員としての責任とやりがいを改めて感じる機会となりました。

診療放射線技師は、放射線と画像の専門職です。より質の高い画像を提供するためにも、検査オーダーの際には目的や臨床情報をできるだけ詳しく記載していただけると、求められる画像をより正確に提供することができます。また、検査後のフィードバックや画像について先生方と意見交換をすることは、私たちの知識や技術の向上だけではなく、ひいては診療の質向上にも大きく貢献できると考えています。画像や検査に関する相談相手として、いつでも気軽に頼っていただけると嬉しいです。



Doctor's Voice



東京医療センター
放射線診断科
金子 裕右

出 身 大 学：金沢医科大学（2019年卒業）
座 右 の 銘：一期一会

タスク・シフト/シェアによって、以前は医師の仕事だったルート確保や注射対応などの業務を支えていただいています。読影などの専門業務が集中してできるようになり、ものすごく助かっています！

Doctor's Voice



東京医療センター
放射線診断科
宮澤 あずみ

出 身 大 学：山形大学（2020年卒業）
座 右 の 銘：今がピーク

撮像方法について相談させていただいたり、さまざまな提案をいただいたりすることで、より診断しやすい画像につながることが多くあります。診療放射線技師さんの高い専門性を、日々実感しています！



「術中モニタリング」で支える安全な手術とチーム医療

2021年から臨床検査技師もタスク・シフト/シェアの対象職種となり、静脈路確保や薬剤投与、超音波検査時の造影剤注入、術中モニタリングの操作などを実施できるようになりました。

その中で、私が主に携わっているのが脳神経外科領域の「術中モニタリング」です。手術中に神経の電気活動を評価することで術後の麻痺などを未然に防ぐ重要な役割を果たすものです。以前は針電極の設置を先生方にお願いする必要がありましたが、臨床検査技師が対応できるようになり、手術前の準備をより円滑に進められるようになりました。

初めのころは、モニタリングが思うように進まないこともあり、文献を読み込んだり、勉強会に積極的に参加したりするなど、スキルの向上に努めました。また、経験を積む中で、先生が「その方法でやってみていいよ」と挑戦する機会を与えてくださったことも、大きな支えとなりました。

「術中モニタリング」は、安全な手術を行うために重要な役割を担っており、準備が整わなければ手術の進行に影響することもあります。その一端を担い、医師の負担軽減やチーム医療への貢献につながっていることに大きなやりがいを感じています。

医師との信頼関係で築くより良いチーム医療の実現へ

医療は、多職種がそれぞれの専門性を持ち寄ることで、より良い結果につながります。医師が持つ臨床的な視点と、臨床検査技師が持つ検査領域の異なる知識を補い合うためにも、日頃から気軽に相談できる関係を築き、患者さんにより良い医療を提供できるよう努めていきたいと思っています。

術後に先生から「患者さん、麻痺が出なかったよ。ありがとう」と声をかけていただいたとき、自分の仕事が患者さんの安全につながっていることを実感しました。また、モニタリング依頼の際に「舟山さんいる？」と声をかけていただけることは、自分を信頼し、安心して任せていただいている証しだと感じています。その信頼に応えられるよう、今後も専門性を高め、先生方が安心して手術や診療に集中できる環境づくりに貢献していきたいと思います。



MEDICAL STAFF_05

臨床検査技師

東京医療センター
舟山 響貴

出 身 地：神奈川県
部　　活：サッカー部
座 右 の 銘：やればできる

連載特集「医師を支えるメディカルスタッフたち」 次号では第2弾“ソーシャルワーカー”を特集します！